

ふるさとこの歴史・文化の再発見と創造を考える

ふるさと 風

第四十号 (二〇〇九年九月)

風に吹かれて(09 9)

白井啓治

『はてさて今年も秋はやって来た』

自分があまり律儀な性格ではないせいもあってか、「律儀(律義)」という言葉が好きである。朴訥ですが律儀が取り柄です、というのが特に好きである。

律儀の最高峰はと言えば、移ろう時の刻みである。何があつたつて、時は刻みを變動することはない。勿論、休むこともない。律儀な一秒の刻みの間隔は、頑なな律儀に守られて永遠に消滅することを拒んでいる。

地球が無くなるつが、太陽系の宇宙が無くなるつが、この時という概念は律儀に、ひたすらに律儀に一秒の時を刻み続ける。

消滅することのない永遠というものを考えた時はとてつもない恐怖を思ってしまう。自分自身は、それこそチャランポランに常に、今この場においても変化を思い、考えているものだから、変わらぬ永遠というものに、圧倒的な恐怖を感じてしまう。

変わらぬと言えば、机の前にある本棚の、特等席というのも可笑しいが、座っていて一番目につきやすい位置に、どういふものか新潮社文庫の

三好達治詩集が辞書や単行本に挟まれ押しつぶされまいと必死に己を主張してそこに住んで居る。住んで居る、という表現も変であるが、住んで居るのである。

それこそ嫌な表現であるが、自立も叶わぬほどのちっぽけな土地にしがみ付いていた、否、しがみ付かされていた水飲み百姓のように、動かず必死にそこに住んでいるのである。

私は、一仕事が終わるたび気分転換の為に机の上や周辺本棚の模様替えをするのであるが、どうしたものかこの文庫本だけは動かさずその位置に居続けているのである。

詩を読むのは嫌ではないが、三好達治が特別好きというわけではない。しかし、気付くといつても目の前に居るのである。一冊だけが大きさが違うのだから理屈からいえば目立つのであるが、実際には埋もれた感じに居る。その位置といつのは、一番目につきやすく手を伸ばししやすい位置で、ほとんどの本が辞書類なのである。

どちらかと言えば、ややストイックな感じに本棚などを整理しないと気に入らない性分なのであるが、この三好達治の文庫本だけはほかの文庫本の所に行かず、目の前に居るのである。だから、時々読むといふよりは、この本のやつまだこんなところに居る、といった感情でパラパラめくって

みるのである。

今もこの「風に吹かれて」の雑文を書き始めた途端、目の前の三好達治が気になりだして、読みたい訳ではないのだが、手にとつてめくってしまった。そして、無作為に開いたページにこんな詩があつた。折角だから、何かの縁でもあるし紹介しておこう。

「かよわい花」

かよわい花です

もろげな花です

はかない花の命です

朝さく花の朝がほは

昼にはしぼんでしまひます

昼さく花の昼がほは

夕方しぼんでしまひます

夕方にさく夕がほは

朝にはしぼんでしまひます

みんな短い命です

けれども時間を守ります

そうしてさつさと帰ります

どこかへ帰ってしまひます

たまたま捲ったページの詩だから、私の感想や思いを書くつもりはないし、書けるわけもない。だが、私の好きになりそうな詩ではある。おそらくは何度も読んでいるはずなのであるが、新鮮に響いてくる。

さて、律儀はさておいて、当会報も三年間、参加者は毎月誰ひとり脱落することなく原稿を書き

続けてくれている。凄いことだなと思う。十月には、ことは座と合同で三周年記念展をギター文化館で行うことになっている。

三年という年月そのものは大したことではないが、継続性の創造できない地であって活動の力を着実にアップさせながらの三年間は自画自賛であつても誇るべきであろうと思う。

この会の力を考えてみるに、言うだけ言って、やる事は誰かがやってくれ、という人が一人もいないという事であろう。一人一人が自分でなければ出来ない事、自分がやらなければならない事は当然のこととしてやってくれることだろうと思う。口だけ参加という人は、実行力がないばかりではなく自分自身の創造性が欠如している人だという事が出来る。彼等の話を聞いてみると、その殆どが何処かですべて、または話題になっている事を言葉を変えて言っているだけである。

まあ、だから逼塞ということなのではあるが、幸いこの会にはそうした人が居ないので、最も我慢すべきところであろう。特に、最初からの打田さん、兼平さん、小林さんには自分でなければならぬ事を自覚した活動を展開していただけているのが素晴らしいことだと思つた。

忙しくて、と言いつくをする人は、暇でも何もしないものである。実際、暇そうに見えても暇な人などいないのだから、忙しいというのは言い訳にはならないのである。手厳しく言つと、言い訳というのは、姑息な奴の考える浅知恵だといえる。自分を振り返つてみても、言い訳を考えようとしている時は、己が怠惰で卑怯になつてきている時である。

歴史ガイドに同行して(14) 兼平ちえこ

先月(ふるさと風、39号)より、常陸国風土記を歩く会の皆さんへのご案内は、染谷地区に入りました。今回は(22)染谷鹿島神社、(23)金山池、(24)波付岩をご紹介しましょう。

先ず、染谷地区について「石岡市史(上)」と「石岡の地名」を参考にしながらご紹介します。

長い幕府政治が終わりを告げ明治維新を迎えた、明治二年に府中平村は、石岡町と改称されました。六年後の明治八年には茨城県が成立。そして明治二十二年には市町村制実施によつて、石岡、高浜に役場が開設され、石川村と井関村は合併して関川村となり、染谷と村上の二村は合併して石岡町に編入された。

昭和に入り、戦争という悲しく不幸な出来事を乗り越え、昭和二十八年には石岡町に高浜町を編入し、翌年、昭和二十九年、三村、関川両村も編入され石岡市が誕生しました。

明治二十二年の「町村制」によつて石岡町に編入された染谷地区は、元禄年間まで府中領の内、のち旗本・皆川氏の知行所となる。

昭和三十五年の深谷重雄「石岡府中部落地名考證」によりますと、日本地名大辞書に依り国府の地及び城下の地を研べてみると、国府及城下より遠くない所に羽鳥、服織、調布等の地がある。布を織つた所や又其の附近に布を染めた地があるものであると言つた。

布を染めることを業としたこの地の染谷も布を染めた地であつて其の名が出来た、遠くない所に羽鳥と言つた地もある。この部落に高野川と言つた

(龍神山と波付岩の中間の斜面に源を發し、波付岩東麓の金山池を経て南流し染谷と粟田の中間を流れて恋瀬川に流入する)がある。昔は村上の里に染屋(コウヤ:染め物屋)がありこの川に来て巾を漂したと傳う、後にこの人達この部落に移り住む。この地、恋瀬川流域に添え耕地が多いので藍を作り染め物を業とし其の業栄え大部落となる。事実當部落は明治末期まで藍を造つていた。この地亦傳説多し。

この記述に大変興味を湧き、染谷地区に住む方、教育委員会の方、何人かにお尋ねしましたが、現在のところ、染め物に關しての地名であつたとの答えは得ることができませんでした。これからも折にふれ、染谷名について、特に染谷地区にお住まいの方で、お話し頂ける方にお会いしたいと思つております。

(22) 染谷鹿島神社

鎮座地、石岡市染谷上ノ宮一〇一七(寶持院に隣接しています)。創建不詳ながら武甕槌命を祭神とし、豊受姫命・市杵島姫命・足仲産命・氣長足姫を併せ祀つている。

境内は、5.4 haあり、東北方の土塁を巡らし、後方に猿田彦命・金山彦・御嶽山・山国狭槌尊の石碑がある。施設は本殿流造り。手水舎の外に、天保十四年(一八四三)建立の鳥居がある。毎年十月十五日には例祭が行われる。

(23) 金山池

恋瀬川から、染谷と粟田の間を北に向かつて開かれた谷津の頭に堤を築いてつくられた池である。現在は常陸風土記の丘内の水際公園として、古代

大賀ハスやあやめ、そして桜、紫陽花、百合、コ
スモス等、季節の花々を水面に映し出し、入園者
の目を一層楽しませてくれている。

「ゴボゴボ池と猪」

龍神山の中腹に猪穴があり、この古猪はときお
り人を化かし、人が道を通ると、東の空に月が上
りかけているのに、その反対側の空に月を出して
通行人に石を投げられ、あわてて木からとびおり
藪に逃げ込むなど、あわてぼうの間拔猪である。
或日の夕暮れどき、龍神さま前にある金山池の辺
りを通った人が、ふと池の方をみると、池の上に
さし出た松のところに丸い、うす赤味をしたお月
さまが出ている。通行人は馬鹿猪だなど覺り、根
元の松の木の幹をゆり動かしたところ、松板にし
がみついている。通行人は幹をゆすりながら大声
で「馬鹿猪！池におっこちろ」と叫ぶと、その大
声におどろいたか、手足を外し、そのままドボン
と水におちゴボゴボもがきながらとうとう溺死し
てしまったという。それ以来、猪の怨念が残った
のか、池の水はいつも、ゴボゴボと鳴っているの
でこの池をゴボゴボ池と呼ぶようになったそうで
ある。

(24) 波付岩

所在地、染谷一五四八・常陸風土記の丘に近隣
する石岡海洋センターの道路反対側の民家側の道
路より下る。間もなく右側に金山池、そのまま進
むこと徒歩五分位のところにあります。

日本の旧石器時代は、数万年以上も前の氷河時
代に始まった。この頃の日本列島は大陸と陸続き
で、日本海は巨大な湖のようになっていた。この

ような時代、龍神山の山麓に残る波付岩まで海が
せまり、海面と陸地との境界線であった。波付岩
は、波止石ともいわれ、標高六十六メートルの岩
山である。また波付岩の粘板岩は、古墳の石室の
材料として利用されたことが知られているそうで
す。

七月末に出向いた時には深緑と雑草に覆われ岩
山を見ることが出来ず残念でした。訪れてくれる
人の為にも整備して頂けたらと願いつつ、今回は
終了いたします。次回は、常陸風土記の丘、園内
をご紹介しますと思います。

・いのち鳴き果たして 蝉ひとり

ちえこ

3周年記念公演へ向けて

小林幸枝

夏はもう嫌だ！ という実感も確り持てないう
ちに、夜風が冷たくなり秋が来てしまいました。
秋の気配が強く感じられた途端、新型インフルエ
ンザの脅威がひたひたと近づいてきています。

10月、ことは座の3周年記念公演です。過去
3年間に発表した作品の中から、3作品を選択し
て演じる他、第16回の定期公演としてかすみかえ
ら市・閑居山の磨崖仏をモチーフとした恋物語を
演じます。

閑居山の磨崖仏は、県指定の文化史跡ですが、
保存のための保全対策が行われてなくて、年毎に
磨崖仏の風化が進み、いまや風前のもしび状態
になってしまっています。

風化し跡形もなくなりそうな石仏に、新たな命
を与えたいと、白井さんならではの志筑の里娘と
僧侶の恋の秘話が紡がれました。今回は、オー
スリアの原住民、アポリジニの民族楽器、ディ
ジリドウ奏者であるふんどし侍の高木さんをお招
きしての舞舞台となります。

先日、ディジリドウの不思議な響きを体感しな
がら、朗読舞を舞ってみました。素朴な民族楽
器が伝えてくれる大地の音が、私の体を震わせ今
までにない舞の動作が引き出されてくるのを感じ
ました。

これから舞歌に書かれた、心の叫びを自分なり
の解釈を構築し、3周年記念公演にふさわしい、
今までにない舞を舞ってみたいと思います。

稽古場の床板を通じて、足の裏から脳天に伝わ
ってくる今まで体験したことのない、これが大地
の声かと思われる振動が、私の感性にどのような
影響をくれ、新しい舞のイメージを生み出してく
れるのか、楽しみです。

白井さんが「高木君には赤禪いっちょの常世の
国のアポリジニになって、常世の風の声を吹かせ
るから、小林さんも赤い腰巻いっちょで舞を舞っ
てもらうかな」と冗談を言っていました。私は
清らかな志筑の里娘だから、そんなはしたない衣
装はつけませ〜ん。

風の会と合同での3周年記念会です。手話の表
現では難しい打田さんの歴史物語の朗読会もあり
ますので、兼平さんの常世の国の五百相のなかで
お楽しみいただきたいと思います。

私も頑張りま〜す!!

ふるさと風の会 3周年展

(文化力がふるさととの豊かな暮らしを創る)

2009年10月13日～18日 ギター文化館

ふるさとの歴史・文化の再発見と創造を考える仲間達が集まり「ふるさと風の会」をスタートさせ、毎月発行してきました会報「ふるさと風」も今年6月で3周年となり、ギター文化館様のご協力をいただき、10月13日より18日まで、3周年展を開催することとなりました。

ふるさととは、物語の降る里であると認識し、文章・絵画・演劇などの表現を通して歴史・文化の再発見と創造を考え、物語を降らす活動を展開してきました。その3年間に生まれた物語を紹介・展示いたします。

3年間の歩み展

ふるさと風の文庫の展示販売、ふるさと風の小窓の展示販売、兼平ちえこ「風のことば絵」と「常世の国の五百相」展、打田昇三作品朗読会(12、13、14日の午後2時～3時・朗読：しらぬひろぢ)。

3周年記念特別公開座談会 10月17日土曜日午後1時30分より

座談会テーマ「今ふるさとに求められている文化力」

出席者 合田寅彦(スワラジ学園理事長)

渡辺兼次郎(陶芸家)

木下明男(ギター文化館代表)

白井啓治(脚本：演出家)

ギター文化館入館料300円(コーヒー付き)

12、13、14日の朗読会は別途400円の入場料が必要となります。

17日土曜日の公開座談会は無料です。

ふるさと風の会編集事務局

315-0001 茨城県石岡市石岡13979-2(白井方) 電話0299-24-2063

癒してくれる木は

伊東弓子

孫達と自転車で走った時のことだった。

「涼しい道はないね」

といわれた。陽ざしの強い日が多かった所為かもしれない、という程度の受けとめかたで、

「そうだね。木を探して休もう。休むという字は人が木のかげにいと書くもんね」

と木の下に行つて辞を書いて話してやつたことがあった。私自身交通手段は自転車なので、寒くても暑くても、多少の雨風でも走っていたが、孫の言葉を聞いたことで、故郷の道への思いを改めて見つめ直してみた。

霞ヶ浦に沿つた浜通りには水辺、田が続き反対側は台に続く崖や里山がある。木立はない。

古い名の残る「市海道」は谷津田と里山の緑を行く。一部林の中を行く所もあるが篠が生えて行く手を遮る。そして畑と林を行くが、林も工場、住宅が年々増えている。

「府中海道」又「住環道、小川海道、旧県道」は香取神社を左に見て坂を登る。長い坂は木立が続いて気分がいい。栗又四ヶと田木谷の境となっている道だ。今では村外れから石岡まで店や家並が続いてしまったが、終戦後は、地域の山持ちの林、森が続いていた所だ。

田妙寺海道は寺から上玉里、高崎、東田中を通つて中津川のお檀家の方へ続く道だが、木立の囲む集落と二つの館跡の間を行く、山林の名残りの多い道だ。東田中に入ると荒れた山道から下り水田沿いに行く、途中六号バイパスの影響を受け、踏切の名も道も消える運命のようだ。

照光寺街道も社や寺の境内に風を感じる程度に

なつてしまった。

絵島道は絵島河岸から亀井の坂を上る。古代の首長の古墳は壊され、中世の城址も消え現代の金持ちの館が出来つつある。三十年代ここには松風が吹いていた。台の山林が開拓され畑になったと聞く。呉羽の会社のフェンスが道に沿つて続き上玉里と高崎の境となっている。高崎側に林がある。高浜町から小井戸にむかう村境の道には木々がある。この一帯も六号バイパスが出来て姿を変えるだろう。

救済道路は当時の田余村役場、田余小学校から田木谷、栗又四ヶの八幡神社(附近)に通じる道だ。以前は大宮神社の西沿いに谷津田や里山、畑の中をくねくねと行つた道を直線にちかい道にしたものだ。

石岡〜紅葉線や国道355線などは先の目的地に行く為の道路であり、スピードの時代に必要で造られたのだから、地域にとつては事故の犠牲も増えた、勿論木立などなくコンクリートの堅い道だ。

農免道路はより豊かな農業にむかつて大量生産した農産物の流通を考えた道だった。

パイロット事業の一つとして高台の便宜を考えて造られた道、この二つの道には志しを同じくした人達の植えた桜の木があり、四季折々の風情が味わえる。

その他にも鹿島へ行く道、成田山へ続く道、八幡太郎が通つた道もある。水戸へ行く道、郡奉行所へ行く道等時々必要だった道があった。もつと身近な日常生活の道、漁に畑に田に山に町に近所隣りに歩いた道は数知れない。

鹿島鉄道が、定期バスが、渡し舟が人を運んだ。

道を歩きながら夏は涼しい木立ちも、冬には陽がささず、いつそ木などない方がいいと思われたことだろう。古墳を壊して作ったから祟りで事故が多い。三夜さまを動かして作った道だからこの部落には不幸が多いと恐れたりして生きてきたのだろう。「みちしるべ」や石仏の姿にも沢山の人の生涯が見える思いだ。人間が勝手に切つたり倒したり植えてみたりしている木の存在は、私達にやさしい木蔭をつくってくれている。かつてはもつと人と道と木立が密だったように思う。

八十歳半ばの男性の話によると、子供の頃父親と冬の朝小井戸へ商売に行ったのだそうだが、木立は高く陽が射さないので寒く、霜柱を踏んで歩いてると草履の裏から冷たさが凍りついて伝わって来たという。せめて木がなくて陽が射せばと思つたそうだ。

暑い畑で働いている嫁の耳に

「おーッ、昼支度だ、何してんだ」

と姑が呼びに来た。その声に急いで山道を先回りして帰つたという。蝉時雨を耳にして、木立の風を受け気持ちよかつたという。下り坂を滑りおり姑より先に家についた手には山百合一輪握つていたという。

人気がない木立ちの茂る細い道には悲しい話も残っている。若い女が通ることを知っていた男が待ち伏せして手込めにしたこともいつか人に知られることになったという。

「……さんが首がけしたんだとよ」

という噂に怖いと思ひながら、おもしろ半分見にいっただ事がある。どんな辛いことがあったのか。

おおびらに合つてはならない人と切ない逢瀬の場所だったと自慢気に話す人の思い出の場にもな

工房オカリナアートJOY

母なる大地の声(音)を自分の手で紡ぎ出してみませんか。

あなたの庭の土で...、また大好きな雑木林に一滴みの土を分けてもらい、自分の風の声をふるさとの風景に唄ってみませんか。

オカリナの製作：演奏に興味をお持ちの方、連絡をお待ちしています。

野口喜広 行方市浜2465
0299-55-4411

る木立。

村の北方側から石岡にかけては大森林地帯であったから色々な話があるという。石岡農業学校へ通う朝夕の怖さといったらなかつたという。俗に「どろぼう山」とよばれている山があつたそう。又乞食が巢をくつていたともきく。追い剥ぎにも追いかけてられてひどい目に合つたという。木に覆われて人の目も届かない所には恐ろしいこと木沢山あつたことだろう。

孫に話したかつたことは、木のある所には空気が動いて風が起る。木は強い陽ざしを避けてくれる。木の傍に人がいると心も体も休むことが出来る。癒してもらえるのだ。木のある所で癒されるだけでなくて必ずそこには道があつて、人が動いて活動している。そして一やすみする所だ。静かに考える場所だ、ということに気がついた。人生という長い道でも憩える木が林がある。そこでひとやすみしよう。そこで振り返つたり考えたりする所がある筈だ。それは何処だろう。

孫たちよ。あなたたちの道程の所どころに、父

親の故郷や母親の故郷がありますよ。爺さん、婆さんがいますよ。友だちがいますよ。もっともつと力を貸してくれるものがありますよ。それがあなた達に力をくれますよ。

暮らし

松山有里

引越してあつたという間に約一か月が過ぎた。ここ一週間で約二年半耕していた畑が重く感じられる日々だ。あんなに気持ちよこめて毎日つきあつてきた畑なのに、たつた一か月で心移りするとは自分でもあきれてしまう。百姓は暮らしと一体となつていないと成り立たないのだということを実感する。畑は家から数分で行ける場所であり、朝起きたらすぐに顔を出せて、今日の仕事を考えられるところでないといけない。昼にはご飯を食べに帰れる場所がいい。新しく家の近くで借り始めた畑の種まきはもう始まつている。ここにはまた瓦谷とは違う風が吹いている。筑波山は直接は見えないが、ここはここでも気持ちがいい。今までは里山の文化だったが、この菅蒲沢は山の文化だ。八郷も広いなあとつくづく感じる。縄文の人々が森によつて生きてきたように、私たちも一歩森に近づいたようだ。これからまたここで何を感じられるのか本当に楽しみだ。

瓦谷の今まで畑で縄文の人々の感動をそのまま感じられたのは本当にうれしいことだ。それが私を本来の道に連れ戻してくれたようなところ

がある。寛さんのところで研修が終わつたあと、

一時は寛さんの言つ通り「他者を苦しめない暮らしをするために百姓暮らしをしているのだ。」と息巻いていた時もあった。でも畑で縄文の土器のかけらを拾い集めるうちに、八郷に来る前の私は、ただもつと単純に生きてただけだつたんだというのを思い出した。初めて訪れた寛さんの畑で、富士山のように雄大にそびえる筑波山を前に、寛さんが蹴飛ばした土器のかけらは私自身だつた。それで今の夫とも出会うことができ、私の「暮らし」がようやく始まつたのだ。数年前名古屋を出発して泳ぎ続けた遠泳は、ここにきてようやく岸にたどりついたようである。ここ数年の変化をなんと説明しようか。数年前には、ここ菅蒲沢に住んでいる私たちの姿なぞどこにもなかつた。人生なにか起るのか本当にわからないものだなあと思う。でもきつと私が望んだからこそ起こつた事どもなのだとも思う。それからあとは天の意思。私が努力して何かできることも限られている。台風にさらされて倒れる稲のように身をまかせられない。こんな自然に左右されたいへんな仕事です。ねとよく言われるが、自然に左右されない仕事のほうが大変な場合もあると思う。百姓をやつていけば、「あきらめること」を体得できる。これが意外に大切なことに思える。芽が出ずに食べることのできなかつた春の菜っ葉類、不作のかぼちゃ、じゃがいも、絹さや、たまねぎ、今年はいればきりがいいほどできなかつた。寝ている隣で「これでグリンピースがたくさん食べれるね。」と寝言されるにいたつては切なくなつてくる程だ。前向きに努力して、だんだんとあきらめることができるようになってくる。これも恩恵だ。身の周

りで起きてくることに流されてみることも大切なことに思える。

それから自分の人生に感動できること。雑誌のなかの誰かの人生やニュースやドラマの中の他人の人生の感動するのではなく、自分自身に感動できること、それも今の暮らしのいいところだと思ふ。毎日涙がでるわけでもなく、ただ坦々と生きていることに深い感動がある。主人公はいつでも「私」なのだ。それを感じられていればどんな状況だっていいと思う。これからも楽しんで今の暮らしを積み重ねていきたい。早速この人たちとのつながりもできはじめていく。ここにもあそこにも暮らしが無数にある。私はただただ長く知恵を重ねて生きてきた八郷の人々から謙虚に暮らしの知恵を学びたい。消えかかっている暮らしの知恵を、消え去る前に知りたい。ただそれだけだ。80代の方から話が聞けるここ数年が勝負だと思っている。ふるさと文化市でもなんとかその試みをしたものだと考えている。

かすめとる

菅原茂美

人のものを『掠め取る』などという事は、実に醜い。コキタナイ。許せない。しかし世の中は、毎日、掠め取る事件で満開だ。人は何故に、このよつな醜い行為を繰り返すのか？

一番悪質なのは「振り込め詐欺」。年寄りがチマチマ貯めた、血のにじむようなお金を、口先八丁で掠め取る。子や孫を思つ親心を、逆手にとつた極悪非道の行為だ。似たような事件は他にも無数

にある。ヒツタクリ・置き引き・空き巣・コソド口・高配当を騙(かた)る詐欺など。

更に近年は、商人のあさましさというか、客を騙して小利を得ようとする。産地、品質、賞味期限、薬効などの偽装。更に保険金詐欺、耐震偽装、脱税やら、裏金やら、ネット商法詐欺など。数え上げたら、キリがない。いずれも人を騙し、なにがしかの利を貪(むさぼ)る。ついに政府も「消費者庁」設置に、踏み切らざるを得なくなつた。更に談合事件など、業者が結託し、あるうことが、首長・議員・役人などの贈収賄も絡んだりし、国民が納めた血税を掠め取る。

人の物や金などを掠め取る行為が、世の中にこれほど多くはびこるからには、これは、たまたま起きた珍しい事件などではなく、いわば、「人間の本性」というものが、良心の抑制を振り切つて、堂々と表に現れたに過ぎないのではないか？

人間の本性は、これまで私が何度も述べたように、『俺のものは俺のもの・人のものも俺のもの』とする、利己的なコキタナイ根性が本性なのではなからうか？ アメリカの西部開拓など、正にその典型だ。先住民を蹴散らし、欲しい儘に領土を奪い盗る。水利を独占したり、よその牛を盗む。

「性悪説」こそ、人間の本性であり、孟子の「性善説」には、いささか、無理がありそうだ。

□つるさい文句を並べ立てた感があるが、私は世の中を常に悲観的に、否定的に観ているわけではない。どちらかといえば超楽観主義者で、まあ、ナント力なるさ！ が基本姿勢だ。そして、人類は醜さどころか多くの芸術や、偉大な文化を創造してきたことは素直に認める。特に科学の発展は、人類に多くの幸せと繁栄をもたらした。

ただし、今世紀に生きている我々が、前世代から受け継いだ清濁交えた文化を、何の工夫・改良もなく次世代に引き継いで、それでよいのか？ といつも考えている。加害者の人権は重く保護され、被害者の救済は後回し。行き過ぎた個人主義の横行。世界を未曾有の危機に追いやった金融市場の混乱等。人道主義はどこへ行った？ 曲つたところは直さなくていいのか？ 雨漏りは修理しなくていいのかと、いつも思っているだけ。

国民が勝手な方向を向いたまま、やりたい放題では、民族としての纏まりがつかない。そこで、国民を大きく纏める絶対的な規範、即ち「宗教」を創造した国もある。あるいは「法律」により国民の行動を規制し、掠め取るつとする内心の欲望を国法で抑え込み、人間の誇りを高めようとする。

がしかし、どのような抑制が働こうが、己の欲望を満たそうとする人間の根本姿勢は変わらない。

日本の歴史上、際立つのは、戦国時代までの「国盗り合戦」。大河ドラマなどでは、これらの戦いを、国主が領民の安寧を護るため…とか何とか言っているが、所詮は隣国との地せぶり合戦。たまにはやむを得ぬ正義の戦いもあったかもしれないが、大方は、ただ己の国の富を増やす、相手国の衰亡を狙う、諸々が、弱肉強食の野生の本能に支配された所業ではなかったか。

このような現象は、なにも日本だけに見られた醜さではなからう。人間の本性が支配する為におこるものならば、諸外国においても、同じこと。

ローマ・トルコ・ペルシャ・モンゴルなどの強力な各「帝国」においても、国盗り合戦は無数にあった。英雄を美化し、ドラマを組み立てたような戦記物語は、無数にある。中国大陸内でも幾多

の国が勃興したことやら。時代が下り、産業革命がおこると、遙か大陸を超え、遠地まで出かけ、文明国は競って未開地の侵略を図った。そして、原住民を殺戮・蹂躪し、彼らの財宝や資源を、限りなく掠奪した。これが人間の本性だ。

前にも何度か触れたが、ヨーロッパ人が南北米大陸の計9000万人の先住民を90%殺戮・抹殺したと色々な本に書いてあるが、銃器などでの直接攻撃のほかに、バイソンなど彼等の食料資源を奪う、いわゆる兵糧攻めや、白人の感染症などを彼等に蔓延させ、抵抗力のない原住民に急速に広がり、絶滅の危機に陥れた。その中で最も酷かったのは、マリアリア・結核(★)・天然痘である。

【★・日本列島の数千体の縄文人の骨からは、結核にかかった痕跡は全く見つかっていない。しかし、弥生人骨が結核にかかり、脊椎カリエス(骨質の破壊)になった痕跡は多数見つかっている。日本最古の結核患者は、鳥取市にある弥生時代の「青谷上寺地(あおやかみじち)遺跡(BC200~AD200年)から発掘された人骨からのもので、65体中、2遺体が脊椎カリエスであったという。通常、結核は肺結核となるが、そのうち10人に1人の割合でカリエスになるので、およその患者数も推定できる。その後、宮崎県、千葉県、東京都の古墳時代遺跡から、次々脊椎カリエスにかかった人骨が発見されている。中国の春秋戦国時代に、内乱を避け、朝鮮半島から日本列島へ避難してきた難民移動と結核の伝搬とが、よく一致するといわれる。

日本列島の先住民は、10万人の縄文人であり、中国内乱の難民である弥生人は100万人も一挙日本列島に押し寄せてきて、縄文人の生活を脅か

した。なお、中国(湖南省・馬王堆遺跡)では、今から2200年前の遺跡から発見されたミイラが、脊椎カリエスであったという。現在全世界で結核感染者数は、3人に一人の20億人。800万人が発病者。そして200万人が毎年結核で死亡。エイズと並び、今なお最強の感染症である。」

さて、産業革命後、ヨーロッパの列強は、蒸気機関という強力な輸送手段を根拠に、銃など最新鋭の武器により、次々未開地を侵略していった。平穩に暮らしていた原住民を脅かし、広大な土地を掠め取り、原住民を奴隷化し、己の利のために、手段を選ばず、植民地支配を続けた。アジアに押し寄せてきたヨーロッパ列強は、東南アジアから中国・そして日本を狙ってきた。しかし日本を占拠できなかった大きな壁は、徳川幕府武士団の武闘能力は驚くほどのものではなかったが、江戸一般市民の識字率は50%を超え、ロンドンの20%よりもはるかに高い。とてもじゃないが、市民レベルの高いこんな国を、思うがままに支配はできないと、早々に諦めた。と、もの本に書いてあった。確かに江戸の文化は、相当ハイレベルであり、芸術・文学・建築工学など世界に決して引けを取らない素晴らしいものであった。

掠め取る話のついでに、大2次世界大戦の後、日本は戦勝国から多くの国土を掠め取られた。ソ連は、カラフト・千島・北方4島はもともと、北海道もよこせと強く迫ってきたという。参戦わずか、6日であまりにもずうずうしい限りだ。さすがに、北海道は、連合国がそれを拒否した。

そして、スイスは、戦後日本が、時計など精密工業が復活して世界に伸(の)してきたら大変と考え、愛知県など中部地方をよこせと迫ってきた

補聴器専門店 いしおか補聴器

補聴器は、大きく聞こえれば良いというものではありません。音がクリアに聞こえるためには、音量を上げるだけではいけないのです。医師の正しい診断と、補聴器専門店としてのスキルが大切です。合わないメガネで目を悪化させることと同じことが補聴器にも言えます。お気軽にご相談ください。

当店は、「ふるさと風の会」「ことば座」を応援し、会報や風の文庫、ことば座公演チケットなどを取り扱っております。また、風の会のことば絵作家、兼平ちえこさんの絵が常時展示してありますので、お気軽に、お立ち寄りください。

(石岡市勤労青少年ホームの並び、直ぐそば。駐車可)

石岡市石岡 2158 6
電話 0299-24-3881

補聴器下取りセール実施中

(壊れている)(合わない)(買い換えたい)
このような補聴器を新しくしませんか?
どんな補聴器でも下取りさせていただきます。

下取り価格：10,000円 で下取ります。

期間 2009年10月31日まで

という。これも内地を分断するわけにはいかずと断り、その代り精密工業がすぐ復旧できないよう、労働者の同盟罷業を定着させ、簡単には精密工業が繁栄しないようにするからとの密約により、スイスを納得させたとも言われる。こうして日本の勤勉魂は根っこを引き抜かれた。その結果が日本では初めての労働者によるストライキにつながり、更にその流れをくんだのが、社会保険庁の杜撰ずさんな年金処理のデタラメに繋がったという。国鉄のストライキや最近の農水省のヤミ専従事件など、みな、その流れをくむものと言われる。

戦勝国アメリカは、小笠原・沖縄などをせしめたが、後に一応日本に返還したとはいえ、軍隊はそのまま居座っている。日米の協定によるものが、本当にアメリカは、日本が他国に侵略されそうになったら、命がけで日本を守ってくれるのか？ と疑問に思う事もある。なぜなら、日本の拉致問題を『強く心にとめておく』と言いながら、北朝鮮をテロ支援国の指定から、簡単に解除したブッシュ政権のあの裏切り行為は、許せない。

国会でも、09年4月、北朝鮮のミサイル発射事件では、日本が攻撃される前に、自衛のため、先制攻撃できないか：など議論されたようだが、ガキのケンカじゃあるまし、感情に走らず、冷静な対処法を検討すべきである。

さて他人の物を掠め取る行為は、人間だけの専売特許ではない。動物たちの方がより激しい。アフリカで、体型の小さいチーターが折角しとめたガゼルなどの獲物を、ハイエナやライオンなどに横盗りされる。また、小型の猛禽類が小鳥などをしとめると、より大きな猛禽類が、それを空中でマンマと横盗りする。これが野生の本態だ。

私が畜産農家の現場でよく見かけたのは、乳牛は、スタンションという首かせをかけられ、一列黄体で繋がれている。牛の目の前には、餌を与えらる長い一列の横溝があり、その溝に各牛の生理状況に応じた分量の餌を同時に与える。すると、欲の深い、気の強い牛は、自分に与えられた餌には口をつけず、まず両隣の牛の餌を長い舌を存分に伸ばし、できうる限り横盗りする。それから、ゆつくりと自分の分け前を頬張る。恐れ入りました。それが生き物の本性なんですな。

ついでに豚は、現在の飼いは、不断給餌と言って、いつでも、餌を食べ放題。食べただけ食べて、後は寝ているだけ。運動など余計なエネルギー消費はしないシステムで飼われている。ところが、一つの豚房に、仮に20頭の豚を新たに同居させたすると、すぐ闘争が始まり、序列が決まる。すると、餌は無尽蔵にいくらでもあるにもかかわらず、まず序列最上位の豚がたろく食べ、次々と序列順位に従い食べるが、自分は動けないほど食べているくせに、最下位の方の豚がいざ食べようとする、上位の者はその邪魔をする。

餌や繁殖相手確保のための序列闘争は、まさに生き物にとって命がけの戦いである。人間世界でも、政界や、会社や、怖いお兄さんたちの組織では、序列こそが唯一の「秩序」なのである。私は動物の戦いを見て、しみじみ、納得しているところである。

序列闘争と言えば、私がすぐ思い起こすのは、秩序を厳重に守るカナダの森林狼の件である。森林狼は、シカなど、狼の生息圏内に獲物が極度に少なくなると、序列第1位の雄と雌の序列第1位とがペアリングをし、子をもうける。他は一切子

をもうけることが許されない。もし、餌がもう少し多ければ、それぞれ第2位が夫婦となり子をもうける。餌が豊富ならペアリングの数も無制限に増える。即ち、餌次第でペアリングの数が決まる。

ところが人間はどうだ？ 食糧や資源があるが無かるうが、経済力があるうが無かるうが無制限に子を生み、生んではみたが、あとは満足に育てられもしない。人口過剰で、社会のインフラやバックアップシステムも満足に整備できない。

人類は知能が進み、万物の霊長などと自認するが、狼の自然環境をよく見極めた、先をよく読み切った生存システムを見たら、どちらが知的生物なのかと、いささか首をかしげたくなる。

さて、我々個々人の、日常での「かすめとる」行為について考えてみよう。

職人は、先輩の「技(わざ)」を盗めといわれる。これはスポーツ選手についてもいえる。職人技というものは、長年、試行錯誤を繰り返して、創意工夫を重ねてやっと会得したものである。血のにじむような汗と涙の結晶なのかもしれない。それを、先輩が「教えてください」といつても、ハイそうですか：とすぐ応じるわけにはいきまい。だから、仕事をしながら、先輩の仕種(しぐさ)をよく観察し、どうすればあのような結果を導き出せるか、自分で考えながら字々：ノウハウをかすめとれ：ということなのである。

プロ野球ヤクルトの青木選手は、ある時マリナーズの「イチロウ」選手のお尻をよくよく観察し、「そうだ！このお尻だ！」と瞬間にひらめいたという。即ち、あれほどの高成績を残すイチロウ選手は、こんなにも下半身を鍛えて、あれほどにしっかりしたお尻を持ち、体の軸がブレないように

なつたのだ！と悟つたといふのだ。それからの青木選手は、来る日も来る日も走り込み、下半身を鍛え、ついにWBCで、日本代表の3番を任される大打者となり、日本2連覇の原動力となつた。

先輩の偉大さを観抜く力量があれば、いつかは、後輩も先輩に追いつけるかもしれない。このように、「盗み取る」ことには、必ずしも、コキタナイだけではなく、人生の教訓も大いに含まれている。

私は仕事や遊びで茨城県内のクネクネ曲つた細い田舎道や、街の中の軒先が張り出した狭い道を、オートバイや自動車で、50年以上も走り続けている。単細胞の私は、経済成長著しかった30年くらい前には、まさかこれらの道は、21世紀を迎えるころには、当然幅広く、真っ直ぐになつて、子供が通学する歩道も付いて、もっと立派な整備された道になつてゐるだろうと単純に思つていたところが、あにはからんや。一つも変わつていない。田舎道など、あれほど細い道なのに、両側の地主は、セッセと地せぶりをして、かえつて、道は狭くなつた。街中で、道路にはみ出した軒先が、大きな車で壊されても、決して、一歩も下がりはしない。公共のためとは夢なのか？民主主義国家とは一体何なのか？全体主義の国でなければ、道路は広がらないのか？

土地に執着する地主の根性は、見上げたものだ。掠め取ると言へば聞こえは悪いが、この根性がなければ、生き馬の目ん玉を引っこ抜くような今日、生き続けられないといふことなのか？...。これまで歩んできた人類のあまりにも多かつたコキタナイ行動。今こそ、これをしつかり反省し、荒(すさ)みきつたこの世を正さなければならぬ。有らん限りの叡智を結集して、もっと穏やか

で、品格と道義に満ちた世の中にする為、今後我々は、人任せではなく、一人一人が襟を正し、天下に恥じることのないよう、後世の子孫に恥じることのないよう、心がけるべきである。

征服の大義・五の章

打田昇三

思想史、社会科学、経済戦略、安全保障などの専門分野で優れた理論を唱えておられる先生方が書かれた「戦争の世界史(日本文芸社)」によれば、戦争が文献に残る紀元前千五百年から二十一世紀までの、およそ三千五百年間で平和が保てたのは延べ二四〇余年しか無かつた計算になるらしい。

規模はどうであれ旧石器時代には既に争いが起こつていたらしいから、精神的には全く進歩が無い訳で「人類は万物の霊長」などと偉そうなことを言う資格は無い。日米両国で何億分の一かの選ばれた人々が戦争を避けて地球の外に避難するために、莫大な予算を使つて宇宙開発が行われているようだが、そんなことよりも、かなり困難な問題かも知れないが「どうしたら戦争が無くなるか...」具体策を検討するのが「先進国」などと勝手に決めてゐる国の責務ではないのか？

国民を飢えさせながら国際世論に背を向けてミサイル遊びや核実験を強行する国があり、その行為を糾弾しても「蛙の面になんとか」では国連の存在が世界平和に何の役目も果たさない。また日本の国会で反対決議などしても相手には通じないから無駄なだけである。驚くことには、その怪しい国の国民が日本に定住していて祖国へ資金を送つてゐるとか：日本も負けずに巨大ミサイルを開

発して「?の人」を土産付きで詰め込み、送り返すぐらいの対抗措置をしないと収まらないかも...。良く考えてみると、今回のミサイル騒動で日本は幕末の黒船来航の時と同じように宇宙戦争の危機を直視させられた。図らずも国際常識が全く通用しない相手の戦力を垣間見ることが出来たし、検証することが難しいミサイル防衛システムの実践配備訓練が出来たのである。ただ「誤報」騒ぎで日本の防衛力が即応には程遠い「専守防衛」のものであると世界中に知られた：平和憲法は生きている：のは国防上で良いことなのかどうか？

「ふるさと“風”」三十五号で菅原さんが「戦争が凶暴性に進化した人類の脳髄」毒饅頭によるもの」と書かれた。確かに殺し合いの戦争は平常心の埒外で全ての行動が野蛮である。それに伴いと言つて良いかどうか疑問だが、戦争の記録などを見ると、参加した人物に「？」と思つ愚かしい行動が目につくことがある。つまり毒饅頭でやられると人間は突飛なこともするのだろうか？

偏見かも知れないが、重箱の隅をつつくつもりでそういう例を挙げてみると、明らかに「これは間違つてゐる！」と叫びたいことがある。例えばエジプトに入り込んだナポレオンはギザのピラミッド近くにある貴重な歴史的遺産のスフィンクスに向かつて兵士に射撃訓練をさせて傷を付けた。その傷は直しようが無いから今でも残つてゐる。

日本でも日露戦争の乃木大将は旅順港を見下ろす二〇三高地に機関銃を据えた敵に対して小銃しか持たない歩兵に突撃を繰り返させ、大勢の戦死者・戦傷者を出した。山頂から絶え間なく撃ち出される弾丸を避けて下から攻めることなど無理なことが分かつていながら何の策も講じなかつた。

この人が後に学習院長になって神がかりの国家元首(天皇)を教育したから日本は機械文明を無視して何でも「神風」と「大和魂」で済ませる国になったしまった。自分は神社に祀られたが、犠牲になった大勢の将兵は無念であつたらう。

戦国時代の例では、小田氏と佐竹氏が筑波山麓の争奪に明け暮れていた頃、石岡市柿岡地区には太田道灌の子孫である太田三楽斎と息子の梶原源太らが佐竹方の武将として城を守っていた。武田信玄が病死した天正元年の四月に小田勢四千余が青柳から小幡へ攻め込んで来た。太田一族と支援の真壁勢が奮戦して小田勢を敵の本拠まで追い返した。その時に小田方では城の表門を明け放しにしていた。攻めて行った太田三楽斎らの軍勢が近づくと、護っていた敵は確かめもせず「御苦労さん」と出迎えてくれたので、そのまま敵の城を占領した。これで鎌倉時代から石岡の大塚(だいにじょう)氏らと張り合っていた小田氏は滅びた。

世界的に有名な話では、ローマ帝国を相手に縦横の活躍をしたカルタゴの勇将ハンニバルは「知謀に優れた人物」と言われ、象を戦車代わりにしてローマ軍勢を苦しめた。其処までは良かったのだが、紀元前二一八年には、イタリアでの決戦に臨むべく三万八千の歩兵、八千の騎兵、三七頭の象を率いて冬のアルプス越えを敢行した。

アフリカ生まれの象はアルプス山中の氷雪を知らない。兵士も同様で多くの者が凍死した。象は三六頭が雪で固まって像になり、ハンニバル騎乗の一頭だけが力チ力チになりながら下りて来た。これでは戦争に勝てない。カルタゴは滅亡した。

カルタゴ帝国は、忒の章で述べたように北アフリカ沿岸部で紀元前八百年代から発展した海洋民

族フェニキア人の国家である。本来は都市国家テイルス(レバノンのイスラエル寄り)にある。現在のスール)の殖民都市として出来たらしい。ペルシアのカンビュセス王に狙われながら本国のフェニキアのお蔭で助かった。地中海西部の貿易を独占していたのだが、ローマ帝国が興隆してきたために喰われたのである。

カルタゴの本家筋に当るフェニキアは一つの国家としてでは無く、地中海東部沿岸部を拠点とする都市国家連合のような形で商売を競い合っていたらしいが、早い段階でペルシア帝国に制圧されたためにフェニキア諸都市が丸ごとペルシア海軍に組み入れられていた。砂漠地帯出身のペルシア帝国が、どちらかと言えば「海軍国」として現代で評価されているのは、全てフェニキアのお蔭なのである。また、フェニキア人は商売のために独自の文字まで創っていた。現代のアルファベットはフェニキア文字を起源としている。

ダリウス大王が強行した理不尽なギリシア遠征を「小規模過ぎる」と批判したクセルクセス一世は、紀元前四八一年にやつと「自分らしさ」の遠征が出来るようになり、支配下にある四六の民族に対し、有るだけの兵を差し出すように命じた。

根っからの商人であるフェニキア人は、儲かりもしないギリシア遠征など頼まれても嫌なのだがペルシア帝国に属国化されているから出動準備命令に従うしかない。それこそ「毒饅頭でやられた馬鹿大王が!」と思いつつも保有する艦船全部を乗員付きで差し出す準備を進めた。

紀元前四八〇年、一年かけて有りつたけの軍勢を揃えたクセルクセスは、お父つつあんを超えた「満足感で、「いざ出陣!」の号令を発した。ヘロド

トスの記録であるから誇張された数字を覚悟で言くと、総兵力二六四万、その半分が非戦闘員の管理要員で料理人から売春婦まで取り揃えた至れり尽くせりの編成であった。実際の戦闘に参加するのは百万に近い歩兵と十万人の騎兵、そして海軍も五〇万の水兵さんが各地の港に集結した。

フェニキアが犠牲を強いられた海軍の戦力は戦艦から物資輸送船まで延べ一〇〇〇隻になった。何度も説明しているように攻められるギリシアは食糧でも資源でも決して豊かな国では無い。それなのに途方も無い数の軍勢を差し向けるクセルクセス一世の頭は完全に毒饅頭で「腐る朽ちす」

陸軍はペルシアの首都から急に安くなった高速道路を使って前進基地のサルデイスに集結、海軍は東地中海を西進してエーゲ海に入り、サルデイス近くのキオス島周辺に投锚して陸軍を待った。両方がトルコ西部に集まったところで丁度、季節が冬になったので「寒いときの戦争は辛いから」と温かくなるまで休憩し(それなら最初から戦争などするな!)春一番を合図に動き出した。

キオス島からは、真っ直ぐに西へ向かってギリシア本土へ進撃すれば良いのに「マラトンの敗戦教訓」が身に沁みていたのか、それともクセルクセスが本格的に狂っていたのか、何とペルシア軍は紀元前四九二年に遠征して失敗したコースを進み出した。陸海軍ともに北上したのである。

客観的に見てこれが「失敗に懲りた改善」と言えるかどうか疑問だが、先ず陸軍はマルマラ海からエーゲ海へ抜けるヘレスポントス海峡の一番狭い所に二本の橋を架けた。有名なトロイ遺跡観光の中継点になるチャナッカレ付近と推定される。かつてダリウス大王は騎馬民族征服に奥地へ進む

際にイスタンブールの辺りで小舟を繋いだ仮橋を架けさせたが、今度の橋は大掛りである。

大軍はギリシア本土の背後から攻めるような形でトラキア、マケドニアを迂回したのだが、これが全く無意味である。前にも述べたように当時のギリシアは纏まった一つの国ではなかった。テーベ、アテネ、スパルタ、プラタイアなどの都市国家がそれぞれに軍隊を持ち、通常はお互いに喧嘩しているのだが、大国ペルシアが攻めて来るというので、オリンピクに準じて一時休戦し暫定的に協調しているだけであった。

それどころか、攻めて来るペルシア軍の中にもかなりのギリシア系民族の傭兵がいたらしいから迂回作戦など取らず、個々の都市国家を一つずつ正面から潰してゆけば良かったように思われる。延々と七、八百kmも遠回りした意味が無い。

海軍のほうも、迂回する陸軍を海上から見守るようにして沿岸部を航行してから敵地に接近している。そして前回の作戦で黒海から来た突然の大嵐にやられた教訓を生かし、難所のカルキディキ半島には運河を掘って通行したというからペルシア軍の軍事予算は、やたらとミサイルを発射したがる 人民共和国並みに豊富だったのか：

さて攻められるほうのギリシア連合は、軍事予算も少ないし兵力もペルシアに比べれば圧倒的に少ない。当時のギリシア人は、日本の平安貴族と同じように戦争に出かける場合には神様にお伺いを立てる風習があった。参詣場所はギリシアの首都アテネから西北へ百七十kmほど、コリントス湾を望む標高七百メートルの高地に置かれた「デルフォイ神殿」である。その台地はギリシアの最高峰・霊山パルナッソス（標高二四五七メートル）

に連なっており古代ギリシア人は、聖地が「大地のへそ」だと考えていた。

デルフォイ神殿遺跡は観光ルートの開発が進んだため、ごく近年にギリシア観光の目玉の一つとなっているが、昔はコリントス湾の入り江から岩肌の露出する急斜面を這うようにして登って来ないと参詣が出来なかった。その途中には、ギリシア神話の悲劇「オイディプス伝説」の現場とされる不気味な場所が有るらしい。有名な心理学者のフロイトさんが主張した「エディプス・コンプレックス」男の子が同性である父親に反発する無意識の心理」の語源となった怪奇伝説である。

壱の章で述べたように、幾つかの古代民族から派生したギリシア語を話す諸民族が「ヘレン」という共通の神から生まれたと信じて「ヘレネス」の名の下にギリシア統一体として異民族を排し、オリンピクの発祥にも関わる 実は、その根元になっているのが「デルフォイの聖地信仰」なのであり、デルフォイの語源「アデルフォイ」とはギリシア語で「兄弟、同胞」「ヘレネスの子孫」を指している。古代ギリシアの指導者は、誰でも戦争を始める前に聖なるお山に参詣して神託をお伺いしたのである。全ての神様を否定しような、かのアレキサンダー大王も例外では無かった。

デルフォイ神殿の祭神はギリシア神話の太陽神アポロンと言われる。日本の伊勢神宮に相当する聖地らしいが、少し違つのは神様のお告げを伝える巫女（みこ）さんが裏山から噴き出すガスを吸って意識朦朧とした状態で登場することである。現代のテレビにもチャラチャラした占い師が出てくるが、素面（しらふ）であるから言うことに信憑性が無い。不気味なガスを吸って全く個人の感

ギター文化館

2009 CONCERT SERIES

- 9月 6日 村治奏一 ギターリサイタル
- 9月 13日 ベルタ・ロハス ギターリサイタル
- 9月20日 ラファエラ・スミッツ ギターリサイタル
- 9月 21・22日 第3回フラメンコフェスティバル
- 10月11日 マリア・エステル・グスマン ギターリサイタル
- 11月 1日 長谷川きよしコンサート

ギター文化館 〒315-0124 茨城県石岡市柴間 431-35

☎ 0299-46-2457

Fax 0299-46-2628

《ふらの》

ピザ・パスタ・アレンジ蕎麦
蕎麦会席料理のお店です
(ギター文化館通り)

看板娘(犬)「うらら」ちゃんが
皆さんをお迎えいたします。

営業時間 11:30~15:00
16:00~18:00

月・木曜日が定休日です。

電話 0299 - 43 - 6888

覚を失った怪しい神託は嘘でも凄味がある。

お伺いの内容は始どが「…今回の戦争に勝てるでしょうか?」というものである。神殿側としては、より正確に占うのが義務であるが売り上げにも影響するから、大概の場合は「…勝ちます!」と言つてやる。喧嘩する両方の国が必ず占いに来るのだから半分は当る。打率五割は偉大である。

勝った都市国家は神殿に膨大な宝物を捧げて感謝の意を表すことになっている。最盛期のデルフォイ神殿域には戦勝国が奉納品を収めるために建立した宝物殿が林立していた。乱世になり神域にも泥棒が出没して宝物殿も荒らされ、現在では大國のアテネが奉納(建立)したとされる日本の石蔵に似た宝物殿のみが復元されている。

十年前のマラトンの戦いではアテネ・プラタイア連合軍が思いがけず強敵ペルシアの大軍を撃退させることが出来た。それは「アテネが強かった」だけでは無く、戦場が海岸でペルシア軍の主力は艦船の上に着て「未だ戦闘は始まらない」と休憩中だったからである。獐猛な犬を棒で追ひ払ったら犬の家族が揃って復讐に来たような今回の事態に対してギリシアでは取り敢えず、喧嘩していた都市国家が一斉に休戦した。

各都市国家の代表が会談し「協力して強敵に当る」ことを確認してから、御多分に漏れずデルフォイの神殿にお伺いを立てた。通常の国内戦ならば適当に「勝ちます!」と言つておけば済むのだが今回は強大な国ペルシアが相手だから、占うほうもギリシア連合軍が勝てないことは良く分かる「それも一〇〇%…巫女さんは上司の指示で遠まわしに「負け戦の予感」だと厳かに托言した。

神託を伺いに来たギリシア連合の使者は腰を抜

かした状態で急な崖道を転がり落ちて報告した。

直ちに緊急作戦会議が開かれ、ギリシア連合軍は総指揮官に戦争上手の国スパルタ市の司令官を選んだ。さらに、その当時のアテネ市には天オの政治家と後世に語り伝えられるテミストクレスと言う優れた人物が居たので、戦術的にはこの人の立てた作戦に各都市国家が従うことにした。

その方法というのは、陸海百万単位の敵を防ぐのは容易では無いので、どこか地の利を確保出来る場所に布陣し陸軍部隊を足止めしておき、その間にペルシア艦隊を叩いてしまおう、というものであった。その場合、サルデイス市の反乱以降、扇動者としてペルシアに睨まれているアテネ市は囷(おとり)のような立場でペルシア軍の目標にされることは覚悟の上ということ了承された。

この計画に基づき先ずアテネ市民の立ち退きが始められた。疎開先はスパルタやオリンピアなどの都市があるギリシア南端ペロポネーソス半島の僻地トロイゼンと、アテネ市の沖に浮かぶサラミス島である。婦女子は遠方のトロイゼンに隠れ、後期高齢者は財産と共にサラミス島に移された。もし周辺がペルシア軍に占領された場合、助かる確率はトロイゼンのほうが高い。しかし財産と一緒にだからは年長組も喜んでサラミスへ行った。

攻め寄せるペルシア大軍の動きは偵察隊によりギリシア連合軍に刻々と知らされる。前線防御の大役を引き受けたスパルタでは、勇猛をもつて知られたレオニダス王が自ら指揮を執り、精鋭部隊がやってきたのだが何分にも兵力が少ない。近辺都市国家の陸軍を全部集めても連合軍は一万人には手が届かない。敵は百倍以上になる。

ギリシアの地図を良く見るとエーゲ海に面した

部分が海老蟹のような形で本土と僅かに離れエウボイア島と呼ばれる島になっている。ペルシア海軍は途中から二手に分かれエウボイア島を挟むように南下してくるらしい。そして陸軍も海軍の動きに合わせてギリシア本土中央部を進んでくる。

この敵を迎え撃つ場所としてギリシア連合軍が選んだのはエウボイア島北端のアルテミシオン岬周辺海域と、そこから南西のギリシア本土側にあるマリス湾岸の要衝テルモピュライである。岬のほうは、南下してくるペルシア艦隊を待ち伏せしてから慣れた水路を東西に逃げれば良い。

テルモピュライはアテネに向かう最短唯一のコースなのだが、マリス湾がトラキス山地の断崖絶壁に接している。平野部からは崖登りのような一筋の細道が抜けているだけで「アテネへの関門」とされた難所である。それを塞いでしまえば大軍と言えども通過することは出来ない。スパルタのレオニダス王は、その要衝を護るべく自らテルモピュライに乗り込んできた。

その場所は地図でエーゲ海側のギリシア本土中央部に一番深く湾が入り込んでいる地点である。現在は海水面の後退で陸地が増え、首都のアテネから旧ユーゴスラビア(セルビア)の首都ベオグラードまで通じる国道一号線のハイウエーが海岸に沿って東西に走っているが、二五〇〇年前は足下まで海が迫る細い道と険しい崖があり、さらに地元で「鍋の湯」と呼ばれた硫黄泉も噴き出すという危険な場所であった。レオニダス王は自ら率いるスパルタの精鋭を中心に千人ほどを決戦の場所と予想される難所に配置した。残りの兵は、ペルシア海軍の上陸予測地点など山寄りの要地に分散配置して守備をさせた。

ギリシア連合軍の艦隊は、ペルシア海軍には及ばないまでも各都市国家から寄せ集めた三百隻の艦船を予定地のアルテミシオン岬に回した。同じ頃にペルシアの大艦隊もエーゲ海北岸のカルキデイキ半島沖からギリシア艦隊の待ち受ける地点に押し寄せたのだが、どうも前回と同じように途中で嵐に遭遇したようである。今回は直後に海戦が行われたので「嵐」のことに触れていない歴史書もあるが、ヘロドトスは四百隻に被害が有ったと言っている。少なくとも数十隻は沈没した？

ギリシア側ではデルフォイ神殿のお告げが「負け」と出たのでアテネ市が別に賚銭を上げ「せめて嵐を起して下さい」とお願いをした。そのご利益で敵の艦隊を嵐が襲ってくれたと大喜びをしたのだが残りの敵艦隊の数はギリシア連合艦隊よりも遙かに多いことは変わらない。賚銭のこともあり、聯合艦隊では一番に多くの船を出したアテネ市が海軍の主導権を握ろうとした。しかし他の都市国家が反対した為に結局、海軍もスパルタ系の人物が総指揮を執ることになった。国家非常の際にも主導権争いは起きるので、平和な日本の政治家がどうでも良いことで揉めるのは当然かも。

ギリシア連合艦隊が内海回りで予定地に到着したとき、嵐に遭遇しながらも残ったペルシアの艦隊は既にエーゲ海側に押し寄せていて戦闘準備が整ったようであった。そして北風に吹き寄せられた難破船の残骸も内海に流れつき戦闘の邪魔になるように海面を覆っていた。ペルシア艦隊は数の少ないギリシア艦隊を見ると、馬鹿にしたように船先を揃えて戦闘態勢をとり様子を見ていた。

ギリシア側も、何分にも敵艦の数が多すぎるから呆気に取られていたのだが一応は「海軍国」と

言われるアテネ艦隊がプライドにかけて敵艦隊の中へ突っ込み、くすぐりしている艦船を囲んで三十隻ほどを捕獲した。それを機に海戦が行われたようであるが、難破船の残骸が散らばる狭い海域では大型艦船が思うように動けない。そのうちに日が暮れたので双方が最寄りの港へ引き上げた。夜になるとまた天候が荒れ出して雷を伴った嵐のようになり双方の艦隊に被害を齎した。ギリシア艦隊は嵐の中を予定どおりに、来た海路を戻ってアテネ沖のサラミス湾へ引き上げたようである。

これより先に、ペルシア艦隊の指揮官は「ギリシア連合艦隊は勝ち目が無いと判断した時点で逃げ出す」と予想をした。これを撃つためにあらかじめ二百隻をエウボイア島東岸のエーゲ海に向かわせていた。狙いは良かったのだが不意の嵐は此処でも荒れ、艦隊の大部分が難破した。詳しい史料は無いが行動の軌跡から見ると、この艦隊は戦闘に参加できなかったと思われる。これを「ペルシアとギリシアの海軍力を均等にしようとした神様の配慮」だとギリシア人は考えた。

必要以上の船団を揃えながらギリシア海軍を迎え撃つ態勢のまま余裕を持ち過ぎ、然も予定外の嵐に邪魔され食いつけられたようなペルシアの大艦隊は、それでも気を取り直して犯人？の後を追いかけてエウボイア島とギリシア本土の間を南東に進んだ。十年前に大失敗を仕出したマラトンの浜辺を右に見ながら、記念写真も撮らずにギリシア艦隊が逃げ込んだと思われるサラミス湾を目指した。其処は憎き敵アテネ市の本拠地でもある。

これより先、大艦隊と呼応しながら辺境テッサリアを南下してきたペルシア陸軍は、いよいよ敵地のギリシア本土に侵入すべくテルモピュライに

近づいた。沖合いには味方の艦隊が海面を覆い尽くすようにしてギリシア艦隊を待ち受けている。その頼もしさに満足しながら陸軍部隊はテルモピュライの手前にあるトラキスの町で休養する予定を立てていた。ところがトラキス平野が尽きると川が前方を遮り、その先の関門に当たるテルモピュライは想像を絶する難所であることが分かった。ペルシア軍は予定を変えて、行く手を遮る難関とギリシア軍の守備状況などの偵察を慎重に行うことを余儀なくされた。

ペルシア軍は四日間を亘って偵察したが、何日かけようと状況は変わらず、五日目になると海上にはギリシアの艦隊も現れたようなので、くすぐずしては居られない。ペルシア陸軍は取り敢えず二十万の兵を狭い道に進撃させた。当然ながら先頭を行く数名の兵士しか戦えず、残りの集団はパーゲンセールに遅れて来た客のように後ろで喚くだけである。ギリシアの守備隊は両側の崖から矢を放ち、迫って来た敵は槍と剣で順序良く倒していたのだが、一回に十名を討つても二十万を片づけるには二万回かかり、救援の敵も予想できる。

守備の限界を感じたレオニダス王は、直属のスパルタ軍兵士三百を残し、他の都市国家から出された兵士七百を間道の守備に回した。沖合いでも海戦が始められたようであり、多くのペルシア艦隊を相手にギリシア連合艦隊は不利な戦いを強いられている。もし海軍が脱出できればギリシア本土へ先行して敵を防ぐことが出来る。何としてもペルシア陸軍の動きを遅らせなくては…レオニダス王は玉砕を覚悟でテルモピュライ守備の兵力を削った。戦闘五日目、守備隊は一步も退かない。

六日目になると、狭い戦場へ機械作業のように

押し掛けていたペルシア軍が少し後退して遠くから真似ごとのように矢を射てくるだけになった。スパルタ軍が「怪しい！」と感じて油断なく前方を警戒していると急に後方が騒がしくなり、思いもかけずペルシア軍が押し掛けてきた。レオニダス王以下三百のスパルタ兵は、必死に戦ったが難関の後方から押し寄せた大軍を防ぎようがなく、全員が壮烈な戦死を遂げた。これが世界戦史に名高い「テルモピュライの戦い」である。

レオニダス王が関門の難所を死守する覚悟から少しは安全な山中の間道に配置換えをした七百の兵士も、結果としては三百の決死隊と同じ運命になった。ペルシア軍は、知る筈の無い間道からギリシア軍の陣地に攻め込んで来たのである。したがって史書に依ってはレオニダス王と共に玉砕した兵士の数を千人と記録している。二十万対三百乃至一千では真とも戦って勝てる道理が無い。

なぜ、間道のことかペルシア軍に漏れたのか？実は、遠回りながらテルモピュライの難関を避けてアテネへ向かう山越えのルートがあることをギリシア連合軍も知らなかった。一足早く現場へ来て地元の人から聞いたのである。難所の手前を流れる川の水源地帯が南の峰に沿って在り一旦は山に入るようにして谷底を通れば、断崖絶壁の切れるアテネ街道に通じていた。昔の章で述べたように、アレキサンダーの出身地マケドニアを始めとする奥地は、オリンピック仲間のギリシア人から疎外されており、テルモピュライから先のトラキスも「野蛮地」「バルバロイ」であった。当然ながらトラキスで足止めされたペルシア軍も裏道のことには知らなかった。難関とは言え攻めても突破出来ない細道一本に苛立った。

ルシアの大王クセルクセスが、癩癘を起こして椅子を蹴ったりしていた時に、一人のトラキス人がペルシア軍の本営を訪れた。この男は「ギリシアの破滅を招いた人物」として後世に名を残しやがて懸賞金付きで殺されることになるのだが、男は先ず「賞金が出るかどうか？」を確認してからペルシア軍にテルモピュライの抜け道を教えた。

怯えながら全滅を待つだけである。アテネ周辺の住民にも避難命令が出された。最大の難関を突破したペルシア軍は西北から東南に伸びるギリシア本土（中部ギリシア）を駆け抜けるように踏みこじり、一気にアテネへ攻め込んできた。

ところが疎開作業が順調に行われていて市内は蛻（もぬけ）の殻である。言つまでも無く守備隊は一気に消された。ペルシア軍は古代都市国家の中心部であるアクロポリスに殺到して神殿などに火を放ち力仕事になるが石造りの建物を壊した。

ふるさと風の文庫

新刊

ふるさとの歴史物語に新しい扉を開いた打田昇三の
歴史エッセイ「ふるさと風にたずねて」(才媛の時代)(1000円)
菅原茂美第二作「遙かなる旅路」(2) (定価: 500円)
伊東弓子作「風のかげ」 (定価: 400円)

打田昇三: ふるさと「風にたずねて」(・ / ・ / ・)
(二冊組: 1000円)

菅原茂美第一作「遙かなる旅路」(1) (定価: 500円)

我がふるさとを“風のことば絵”という新しいスタイルのふるさと
表現絵の兼平ちえこの足跡を辿る一行文を集大成!!

ふるさと「風のことば」 (定価500円)

日々の暮らしの中にふるさとを想う心を吐いたエッセイ集

兼平ちえこ「風邪に押されて」 (定価500円)
小林 幸枝「風に舞う」 (定価500円)
白井 啓治「移ろう風の中に」 (二冊組: 800円)
近藤治平「風に吹かれて」 (二冊組: 800円)

ふるさと風の文庫は、・ギター文化館: 0299-46-2457

・いしおか補聴器: 0299-24-3881

にて販売しております。

ふるさと“風”の会 事務局 石岡市石岡 13979-2 (白井方)
電話 0299-24-2063

その際に疎開しきれなかつた神殿の財宝は奪われたようである。クセルクセス大王は「イオニア反乱でサルデイスの神殿を焼いたギリシア人への報復」と宣言した。なお現存するアクロポリスは、その時に壊されたものを再建した後に一七世紀に起きたトルコ（ギリシアを支配中）とベネチアの戦争で粉々にされ再々建したものでらしい。

さてギリシア連合軍の陸軍はテルモピュライで壊滅的な被害を受けたが、海軍のほうは海戦と嵐とで何隻かの艦船を失いながらも、予定どおりの行動でペルシア艦隊より先にサラミス湾へ帰還していた。エーゲ海からアテネへ入る海域である。神様が助けてくれたお蔭でペルシア艦隊の艦船はかなり減ったがギリシア側も被害を受けている。サラミスへ戻れたギリシア艦隊が大小合わせて二五〇隻から三五〇隻、追いかけて来るペルシア艦隊はその倍ぐらいと推定される。

地上ではアテネ市などが敵の大軍に押し潰されている。ギリシア式の戦闘は陸軍と海軍とが協同で戦うのが基本であったが今回は陸軍を救援する余裕も無く、ギリシア海軍は迫りくる敵を何処で迎え撃つか存亡を賭した決戦海域の選択に迫られていたのである。多くの指揮官たちは艦隊の行動を考えた上で、クレタ海の方に張り出したペロポネーソス半島の付け根に当るコリントス湾を主張した。しかし総参謀格のテミストクレスは反対側のアテネ湾入口にあるサラミス島の水道を強く推した。そこはテルモピュライと呼応して戦ったアルテミシオン岬よりも一段と狭い海域である。ギリシア艦隊は、何か奇策があるらしい知患者の意見に従って其処に集結した。

アテネを占領したペルシア陸軍は、ギリシア艦

隊の様子を見届てから味方の艦隊にそのことを知らせたが「場所が狭い」と聞いてペルシア海軍の指揮官はためらった。大艦隊では動きがとれない。ここは広い海域でじっくりと待ち、ギリシア艦隊が弱って出て来るところを一気に叩けば良い。ペルシア艦隊はギリシア海軍を封じ込むような形でサラミス水道の入口に停泊した。

ギリシア艦隊を袋小路へ追い込んだ状態で何日かが過ぎたが敵が動く気配が無い。長い航海でペルシア艦隊の食糧も少なくなっている。ギリシア艦隊が早く出てくればと願っているところへ一隻の小舟が現れた。乗っているのは何の武器も持たない一人の男である。ペルシアの艦隊に向かい盛んに手を振っている。

捕まえて尋問すると、「自分はアテネ海軍の指揮官に仕える者だが、ペルシア国王に申し上げたことがあるので、ぜひ取次をお願いしたい」と途方もないことを言い出した。取り敢えずペルシア艦隊の旗艦まで連行して、数名の幹部が話を聞いてみた。男は先ず怯えたような態度で「私が此処へ来たことは絶対に内密にして頂きたい」と念を押してから「私が仕えるアテネ海軍の指揮官は、この度の戦争が全くギリシア側に不利なことを覚っており、今からでもペルシア国王に降伏したいと思っています」と言った。

「そればかりでなく」と言葉を切った男は「アテネ艦隊のほかに負けると分かっている戦闘が嫌で脱出したいと思っている者は大勢居るのですが、一部に決戦を主張する者も居り、逃げるにもペルシア艦隊に睨まれているから出られないのです。今は逃亡を主張する組と戦う組とで内部分裂を起しており、そのうちに同士討ちが起こる

ことも予想されます。したがって、もし大王がギリシア艦隊を攻撃されるなら、今がチャンスであると、我が指揮官は申しました」と答える。

アテネ艦隊指揮官の家来と名乗ったこの男は、ギリシア側の総参謀テミストクレスの奴隷であり歴史の父・ヘロドトスは「テミストクレスの子供の養育に当たっていたシキンノス」としているから奴隷でも信頼できる優れた人物だと思われる。

ペルシア艦隊にもギリシア人の傭兵が居るし、都市国家の一次的な集合体であるギリシア軍にペルシア側への同調者が居ても不自然では無いからシキンノスの口上を聞いたペルシア艦隊の指揮官は頭から尻尾まで信用し、深夜に全艦隊を味方陸軍の見守る海岸沿いの狭い水道内へ密かに進入させた。同時に周辺の小島には陸軍も配置され戦闘による負傷者の收容から、ゴミの始末までギリシア艦隊を全滅させた前提での準備が暗闇で開始された。これらの行動は夜を徹して行われたため明け方には全員が眠くなっていた。

「ペルシア艦隊は網にかかった」と戦闘が開始されたのは夜明けであるが、ペルシアの全艦船が行列を連ねて狭い水道内で敵艦隊のほうに舳先を向けようとぐずぐずしている間に、ギリシア艦隊は準備宜しく敵艦の横腹に体当たりで突撃した。

ギリシアの船は舳先が鋭い。ペルシアの大型艦船は横から体当たりされると大きく傾く。そこへ槍をかざした水兵が乗り移り敵兵を殺傷するのではなく、効率的に海中へ叩き落とす。ペルシア艦隊は慌てて方向転換を図り脱出を企てたのだが狭い水道では自由が利かず衝突を繰り返す、混乱のなかで同士討ちを始める始末であった。

多くの損害を出したペルシア艦隊は、辛うじて

脱出した艦船を現在のアテネ港（ピレウス港）から少し離れた古い港に集めてから、振り向きもせず逃げ帰った。ギリシア海軍の大勝利となった「サラミスの海戦」である。

「ペルシアの艦隊が一気に攻撃をかける」旨の報告は届いていたから、早起きしたクセルクセス大王はピレウス港近くの高台に玉座を拵えさせ、シヨでも見るようなつもりでサラミス水道を見下ろしていた。頭から「ペルシア艦隊の活躍」を信じているから、次々と衝突しているのはギリシア艦隊側だと思っていたのだが、どうも様子がおかしい。そのうちに「サラミスの敗戦」が分かると叔父でもある將軍のマルドニオスに後を託して自分は芝居見物に飽きた金持ちのように、さっさとペルシアへ帰ってしまった。

マルドニオスは、参の章で登場したダリウス大王の五人の盟友の一人・ゴブリアスの子で、妻がクセルクセスの母の妹であった。ペルシアの超エリートながら名目だけでなく名將といわれた。

「行きは良い良い、帰りは怖い」という童謡がある。「ペルシア海軍がアテネで負けた」情報が伝わると、それまで抑えられていた各地の反ペルシア勢力が報復の反抗に転ずる恐れがあるから、クセルクセス大王の退却は、途中での水や食糧の調達も儘ならないような状態で辛うじてペルシア本国へ辿り着いたらしい。

それに引き換え異国の地へ置いてきぼりにされたようなマルドニオスのペルシア陸軍は、先にはテルモピュライで戦い、今回も大王の護衛に人員を割いたもののアテネ近郊に多数の軍を残存させていたから、ギリシア軍も攻撃は出来なかった。マルドニオスは兵をまとめて、ギリシア人が最果

ての地と考えている北部のテッサリアまで引き上げた。既に季節は初冬である。夏が暑いテッサリアはバランス良く冬も寒い。ペルシア軍はじつとその地に留まって冬を越した。

紀元前四七九年の春、ギリシア諸都市の指導者が「退却するであろう」と予測していたペルシア陸軍は、マルドニオス將軍の指揮の下に再編成され騎兵隊を含む五万から十萬の戦闘要員を擁する大軍団となってアテネ周辺を襲った。聖地アクロポリスは再びペルシア軍に蹂躪され、実質的な被害は壊れた神殿が更に丁寧に壊されただけであるがギリシア人は精神的に大きな痛手を受けた。

ペルシア軍もアテネ周辺には何もないと分かり少し軍を後退させてアテネから北西へ五〇kmほどのプラタイアに布陣した。ペロポネーソス半島を大きく迂回しなければギリシア海軍が救援に来られない場所である。敵を追撃する立場になったギリシア陸軍は、ようやく敵軍の数字に近い兵力を集める見込みが出来て追撃することになった。

テルモピュライ古戦場を通る国道一号線はアテネから北上してギリシア本土の東側沿岸部を抜けるのだが、聖地のデルフォイへ行くには途中から別の国道だか県道で少し内陸部に入る。途中には有力都市国家のテーベ（テバイ）があった。プラタイアはテーベ郊外の、ペルシア海軍がやられたサラミス湾（水道）に通じる街道沿いにある小さな集落であった。周辺には幾筋もの川が流れていてペルシア軍が一番大きい川を越した地点に展開しギリシア軍を待ち構えるようにしていた。

珍しく兵力を確保出来たギリシア軍のほうは直ぐにも出陣したいのだが丁度、貴重な小麦の収穫時期になっていたので農作業を優先させ、農作業

ギター文化館発「ふるさと文化市」

自慢すべき美しきふるさと「常世の国」と言い表された常陸国。この美しいふるさとに今欠けているものは、人の流れを創造しようとする知恵と情熱ではないでしょうか。この度、ふるさと常世の国を愛する仲間が集まり、この風土に培われてきた文化の力を持って「新しい人の流れを創造」しようと「ふるさと文化市実行委員会」を設立することとなりました。私達の暮らしのあらゆる側面において精神的な生活にかかわるものとして創造されたものの総称を文化と呼びます。そして文化とは、自分達の暮らしを主体的に考えることから生まれてきます。

暮らしと文化は、与えられるものではなく、自分達が考え創造する中にあるものです。ふるさとの暮らしに閉塞感や逼塞感を見たり、見てしまったりするのは、自分自身が自分の暮らしを主体的に考え、創造しようとしなからだといえます。この素晴らしいふるさとの中に、私達は主体的創造力を放棄した「仕方がない」という言葉を捨て、「方法はいくらでもある」と暮らしの夢、未来を主体的に紡いでいきたいと考えます。

ふるさと文化市実行委員会 《仮連絡事務所＝いしおか補聴器 0299-24-3881（担当：阿部）》

で疲れた兵士が、元気なスパルタ軍に引きずられるように戦場へと向かっていった。農作業の途中だから食糧も僅かしか携行出来ない。

両軍は川を挟んで南北に対峙した。ギリシア軍はペルシアの大軍が直ぐにでも攻撃してくることを予想したのだが、ペルシア軍は他人事のように「のんびり」として襲ってこない。そのうちにギリシア軍の食糧事情が悪くなってきた。指揮を執っていたスパルタの将軍も「腹が減っては戦が出来ぬ」という諺を知っていたようで、全軍に撤退命令を出した。何しろ敵前であるから引越し準備も落ち着いては出来ない。将軍は直属のスパルタ兵士には戦闘態勢をとらせておいて撤退作業を急がせた。ペルシア軍がこの状態に気付いた。

川を渡って来たペルシア軍はギリシアの陣営を見渡してから、一番に暇そうな（弱そうな）部隊に狙いを付けて攻撃を行ってきた。ペルシア軍の総指揮官マルドニオスも、狩りをするぐらいの気持ちで戦列に加わっていた。ギリシアの陣営は急ぎ戦闘態勢に入ったのだが、敵は「弱そうだ」と狙いを付けた戦列に突っ込んでくる。ところが、その集団こそ勇猛を以て知られたスパルタ陸軍の部隊であり、勇将パウサニアスが充分な備えをさせておいた陣営であったから堪らない。激戦の末にマルドニオス将軍が討たれてしまった。これで勝負あり。昭和二〇年に玉音放送という意味の分からないラジオを聞いた日本人が、何となく「負け」を意識したように、ペルシア軍は騎兵の援護で一斉に戦場を離脱した。四の章で紹介したペルシア軍の贅沢ぶりが明らかにされたのはこの時のことであり、「プロタイアの戦い」として知られる。

この戦闘を最後にギリシアは解放された。一致

団結とまではいかないが、主要な都市国家が争いを中断して強大な敵を撃退した記念に「黄金の鼎（かなえ 三脚の器）」と三匹の蛇形円柱座「ゲルフォイ神殿に寄進された。黄金製品は行方不明らしいが、円柱座のほうは現在モイスタンブル中心部のブルームスクとアヤ・ソフィアの間にある広場（ローマ時代の競馬場跡）に残っている。勢いに乗った」と言うよりも、窮地を脱したギリシアは、海軍がエーゲ海を渡ってトルコ沿岸部に居たペルシア海軍の艦船を奇襲攻撃した。ペルシア側では「自分で始末しますから」と艦船に火を付けて焼き払った。これで、長年に亘るペルシア帝国のギリシア侵攻は、やっと終わった。

「ギリシア遠征」の悪夢にとりつかれていたクセルクセス一世は「戦争が毒饅頭のせい」と気づいたようで帰国以来、饅頭を食べなくなり、引き籠もり生活を続けているうちに家臣に暗殺されてしまった。ペルシアもギリシアも大きく変わってゆくのだが、その度に戦争は付いて回った。

ふるさと歴史物語：朗読会

いしおか補聴器では、ふるさと歴史物語作家の打田昇三さんの作品を、ことば座の協力で、朗読に聞く会を11月から月一回開いていこうと考えております。

ふるさとの歴史や伝承物語を、囲炉裏を囲むような形で、生の声に聞くことによって、自分達の住むふるさとの良さを、再認識することが出来るのではないかと思います。詳しくは、本紙来月号にお知らせいたします。

いしおか補聴器 0299-24-3881

ふるさと風の会会員募集中!!

ふるさと風の会では、ふるさとの歴史・文化の再発見と創造を考える仲間を募集しております。

自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に表現し、ふるさと自慢をしたいと考える方々の入会をお待ちしております。会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末(最終土曜日)に勉強会を行っております。入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

白井啓治 0299-24-2063 打田昇三 0299-22-4400
兼平ちえこ 0299-26-7178 伊東弓子 0299-26-1659

「ふるさと風の会」

URL: <http://www.rekishinosato.com/kazenokai/>

編集後記

新型インフルエンザが猛威を振るおうとしています。後手後手の政府に任せるだけではどうにもなりません。自分出来る予防はなりふり構わず実行することが必要であると考え、今日この頃です。

編集事務局

〒315 0001

石岡市石岡13979 2

0299 24 2063

(白井啓治方)

URL: <http://www.rekishinosato.com/kazenokai/>

ギター文化館発「常世の国の恋物語百」

第16回定期公演「閑居山磨崖仏秘話」100/22話

(10月18日日曜日：午後2時開演)

脚本家白井啓治の創作メモ

ことば座の3周年記念に当たる16回定期公演に取り上げたい題材が何かあるかと、女優小林幸枝に訊ねたところ、閑居山にある磨崖仏はどうでしょうか、と言われた。数年前に見学したことがあったが、県指定の史跡にもかかわらず、酷い荒れようであった。今度改めて出かけてみたら、以前に増しての荒れようで、見るも無残であった。文化遺産を大切にしない土地柄を象徴していた。志筑に魅せられ、二万石を八千五百国に変えてまで領主になった本堂茂親と話せるものなら、嘆きを語り合っていたいものである。

何時消滅してしまっても不思議ではない現状の百体の磨崖仏にどんな恋物語を重ね合わせる事が出来るのだろうかと思っている時、禪侍と自称するディジリドゥ(オーストラリア・アボリジニの民族楽器)奏者高木さんと出会い、この磨崖仏の前で、ディジリドゥをバックに小林幸枝に舞わせてみたら、の思い付きで、物語を書き下すことにした。

百体の磨崖仏は、閑居山願成寺の僧侶「乗海」が彫ったとされているが、その真偽や乗海のこと、何故磨崖仏をの由来、所以などは何もわかってはいない。願成寺は、弘法大師が開いたとされているが、開基は峰寺山西光院を開いた徳一法師である。

そこで、この徳一法師に百の由来として、「人の心には百の表情(すがた)、百の容(かたち)がある」を語らせ、無門関にある筆者の好きな「出得するも出得せざるも、われもかれも自由なり、神頭は鬼面と共にならび、敗闕も当に風流なり」を乗海に語らせ、菜津と称する志筑の里娘との悲恋を物語ってみることにしたのである。

稽古を始めてみて、ディジリドゥが低く地鳴りのごとく大地を讃歌する声に、小林幸枝の常世の風に舞い揺らぎが想像以上にマッチし、朗読舞の新しい一面が出来るであろうことが、期待できる。(白井啓治)

前売券は、ギター文化館、いしおか補聴器にて取り扱っております。

ことば座事務局 電話0299-24-2063

ことば座「風の塾」生徒募集中!!

ことば座では、暮らしの中で新しい自分を発見し、表現するための後押しをする

教室「風の塾」を開いています。(各教室は月2回の授業。受講料月額3,000円)

絵と一行文教室 (講師：兼平ちえこ 白井啓治)

詩を手話で舞う「朗読舞教室」(講師：小林幸枝 白井啓治)

エッセイ教室 (講師：白井啓治)

朗読教室 (講師：白井啓治)

入塾および教室の詳細は、下記「ことば座事務局」(担当：白井)
電話 0299-24-2063 までお問い合わせください。

石岡市柴間ギター文化館発「常世の国の恋物語百」

ことば座3周年記念公演&第16回定期公演

2009年10月16, 17, 18日

2009年10月17日で、ことば座は創設3周年を迎えることとなりました。
皆さま方のご支援のおかげと、劇団員一同感謝いたしております。

3周年記念公演では小林幸枝お気に入りの恋物語3作品を、定期公演では「ふんどし侍」高木崇光との共演で、新しい朗読舞劇の表現に挑戦します。

3周年記念公演(10月16, 17日:18時開演)

16日「恋瀬川物語」「漆黒と雑木林と星たち」

17日「緋桜怨節」(菖蒲沢薬師堂弁天池秘聞)

第16回定期公演「常世の国の恋物語第22話」(10月18日:14時開演)

閑居山磨崖仏秘話

閑居山に磨崖仏の百体が彫られた真実が今明かされる。百体の仏の意味は徳一法師の言葉にあった。
3周年記念に当たる第16回公演は、ディジリドゥ奏者、自称「禪侍」の高木崇光を招いての朗読舞劇です。

人の心には
百の表情(すがた)がある
人の心には
百の容(かたち)がある
意地悪の表情、容もあれば、
慈悲の表情、容も持っている
一つを見て
決して一のすべてを
断ずることなし

脚本:演出 白井 啓治
舞台背景画 兼平ちえこ
舞台装美 小林 一男

朗 読 しらみひろぢ
朗読舞 小林 幸枝
高木 崇光
(ディジリドゥ演奏)

信ずるものは 信じられるものは 唯一美
信じられるものは心の美
心の美は容ありて容なし
匂いありて匂いなし
表情ありて表情なし
裏切りも人の美の容
姑息も 卑猥も 人の心の美の容

入場券3,000円(前売券2,500円 3日間通し券6,000円)小学生1500円

前売券は、ギター文化館 0299-46-2457

いしおか補聴器 0299-24-3881 で取り扱っております。